

徳島ペンクラブ通信

発行

徳島ペンクラブ

徳島市東沖洲2丁目1-13

徳島県教育印刷(株)内

TEL 088-664-6776

176号

平成29. 3. 30

ペンクラブ創立から半世紀 「選集」記念号の概要決まる

— 10月 —

B5判 1000部を発行

著名人50人のメッセージなど多彩

記念行事の日程も

徳島ペンクラブは昭和42年11月創立、今年で丁度50年になる。そこで、この節目の年に、機関誌「ペンクラブ選集」PART 35を、50周年記念号として発行することは既報のとおり。記念号の発行と並び、50周年記念パーティー、ペンクラブ50年の歩み展（仮称）を別項の通り、今秋10月に実施することが最近の理事役員会で決まった。

記念号の選集PART 35の概要は、B5、

400ページ以内、一部カラー、発行は10月11日、発行部数は1000（通常は600）、経費の概算は110万円と消費税。他に発送費等必要。

主な内容は、巻頭言▽祝辞（知事ほか2人）▽グラビア▽年表付き50年の歩み▽座談会▽寂聴さんの寄稿文▽県内外の著名人50人に「とくしま物語」を依頼▽ペンクラブの主催、協賛事業の紹介▽通常の会員作品▽県内文学碑の紹介▽第18回とくしま随筆大賞の発表▽全国のお薦め文学館▽全会

竹内会長にとくしま芸術文化賞

徳島ペンクラブの竹内菊世会長が、このほど芸術文化の振興に貢献した個人を顕彰する第9回とくしま芸術文化賞に選ばれ、3月22日あわぎんホールで徳島県文化振興財団から表彰された。

竹内会長は、昭和43年にペンクラブに入会、平成25年から会長として、県民参加型の文芸イベントを開くなど活躍。また、同人誌「飛行船」を平成19年に創刊し、



飛行船文学賞を設けるなど新人発掘にも貢献している。

同会長は「受賞、うれしく思います。好きなことを長くしてきた結果、このように褒めていただけるのは、いい仲間と健康に恵まれたお陰と感謝しています。これからも、元気で文筆活動に励んでまいりたいと意を新たに致しました」と話している。

会長は平成25年に出版した「大河汪 汪 母なる吉野川」でも、同財団から「とくしま出版文化賞」を受賞している。

収入源が会員の作品掲載料だけとなるため、今回は徳島銀行、阿波銀行、徳島新聞社会文化事業団等に助成金を申請中。このほか、初の試みとして県内企業からCM（広告）の募集を実施。

創立50周年記念パーティー

- 期日 10月9日（月、祝日）
- 会場 阿波観光ホテル
- 内容 第18回とくしま随筆大賞の授賞式を兼ねて行う
- 詳細は未定

● 県民文化祭参加

徳島ペンクラブ50年の歩み展（仮称）

- 期日 10月20日（金）～22日（日）
- 会場 県立文学書道館
- 内容 50年の歴史が分かるパネル展示ほか（詳細は未定）

記念号

一般原稿の募集要項

□ 全会員からの寄稿を期待 □

創立50周年記念「徳島ペンクラブ選集」PART35の一般原稿を次の要領で募集します。発行が例年と違い10月となったため、原稿の締め切りを6月末日とさせていただきます。お間違いのないようお願いいたします。特に今回は、50周年記念号であり、全会員の皆様からのご寄稿を期待しています。また、小説を書かれる方は、短編で結構ですからご寄稿いただき、記念号に花を添えていただければと願っています。

一般作品（今回、特集はありません）

随筆は2ページ分、2000字。短歌・俳句等は2ページ分、15首（句）、詩、連句も2ページ分。小説は短編。

● 掲載料 2ページ分7000円、追加2ページごとに4000円。掲載料は、翌年1月末に郵便口座引き落とし、または郵便為替

雑感

毎年三十年余り、二反の田んぼで米を作っている。田植えを行う前に、元肥もとこえを与えるのだが、私は、牛糞を使っている。ふつう農家では化学肥料を使うが、私は有機農法を実践している。除草剤も使わないため、草が稲の背丈と同じ位に伸びる。私の子ども頃には、苗を手で植え、稲を鎌で刈り、稲束を天日で干していた。さすがに今では田植え・稲刈り・乾燥は、機械の世話になっていく。時代の流れには逆らえない。

私の米作り

現在、水は吉野川から汲みあげられ、高圧をかけられ、太いパイプを流れてくる。バルブをひねると水が出てくる。一定の水位を設定すれば、自動的に水が入り、止まる。稲は天然のきれいな水で育てられている。私は稲の消毒はしない。病原菌や虫にとって毒になるものは、稲にとっても毒なのだ。病気や虫の思うままに任せている。人間が害虫と呼ん

でいるだけで、虫にとっては生きていくために、米を食べるだけのことなのだ。人間も虫も生きるために、食べなければならぬ。その虫を食べるために、カエルやスズメがやってくる。水を張った田んぼには、タニシや小さな甲殻動物が居る。白鷺がカエルやタニシや水中小動物を食べる。地下ではミミズが棲んでいて、それをモグラが狙ってくる。私の田んぼは、なかなか賑やかである。虫に食べられたところで、収穫量は1%以下の減産でしかない。私は田んぼを見回りながら、虫が飛び交っているのを見て、「共存共栄」と口

の中で唱えている。

私の収穫したお米は、JAなど一般市場では不人気だ。虫に食われた黒い米粒が入っていたりして、みたくれは悪い。味は純粋に米の味がして、すこぶるおいしく、保証できる。根強い支持者がいて、毎年買ってくれる。毎日食べるものなので、小さいお子さんには安全・安心だと、喜ばれている。

（小川 公三）

で徴収します。

●原稿の締め切り 6月末。

●原稿の送り先・お問い合わせ 〒770-8074 徳島市八万

町下福万128-28 田上倉平宛 電088-668-3563

E-mail jonan@mc.pikara.ne.jp

※原稿のご送付に当たっては、安全のため必ずコピーあるいは控えを保存ください。

浅香氏を講師に研修会

野上恵子さんに輝く

ペンクラブ賞 船越理事が講評



竹内会長(左)から副賞の花束を受ける野上恵子さん

今回4回目となる研修会が3月12日、ペンクラブ賞の発表と表彰を兼ねて、徳島駅前の阿波観光ホテルであった。

会員39人が出席。竹内会長のあいさつの後、桂事務局長からペンクラブ選集P A R T

34の随筆・特集記事の中から、会員の投票によって選ばれたペンクラブ賞1人、次点5人の名前が発表された。栄えあるペンクラブ賞に輝いたのは、野上恵子さんの「亀のこころ」。娘さん夫婦から預かった小動物と家族との物語を、軽妙なタッチで描写している。



1人ひとり紹介される次点の(左)から小川公三、熊谷和代、竹内紘子の皆さん

次点の5人は熊谷和代「祇園精舎の鐘の声」、小川公三「文学の責任―自己中心性の克服―」、竹内紘子「東北あれから5年」、藤本七三夫「されど人生」、増田裕子「七年目の母へ」の皆さん。ペンクラブ賞と次点の計6作品は、次号の徳島市民文芸集「まゆやま」に転載される。

表彰式があり、野上さんに、竹内会長から賞状と花束。次点の方(藤本、増田さんは欠席)は前に出て一人ひとり紹介された。この後、恒例となっている会員による講評。今回は船越淑子理事が、ペンクラブ賞、次点の作品について別項の通り講評した。

野上さんは、「立派な皆さん方の中で、こんな田舎の人を選んでいただけてうれしく思います。また、船越さんには、的確な講評を頂戴し、感謝です」と、受賞の喜びを話している。

続いて、講師としてお招きした徳島県演劇協会顧問で徳島市文化振興公社芸術監督の浅香寿穂(あさか・ひさほ)氏が、「露天の口上



鍛え抜かれた話芸で会場を沸かせる講師の浅香寿穂さん

・啖呵売」と題して講演した。昔懐かしのバナナのたたき売りや、いろいろな売りの口上など、解説と実演を織り交ぜながらの1時間。若いころは俳優志望だったという、鍛え抜かれた話芸で会場を沸かせていただいた。

午後は、部屋を変えてランチをしながらの懇談会。「ペンクラブ選集」P A R T 34の作品の



即興でハンドベル演奏をする(左)から、竹内菊世、山口久雄、鈴木綾子、住友京子の皆さん



ハンドベル演奏を楽しむ皆さん(下も)

感想を交歓、今年、創立50周年を迎えたペンクラブの今後の事業予定なども紹介された。途中、山口久雄会員をリーダーに、竹内菊世、鈴木綾子、住友京子の4人の皆さんによる珍しいハンドベルの即興演奏も。「となりのトトロ」など7曲ほどを披露。アンコールの声に2度応えるなど、和やかなうちに幕となった。



船越理事の講評

亀のこころ

● 野上 恵子

話は去年の夏、娘さん夫婦より犬のココアを預かった所から物語が始まる。小動物たちが登場するのは、亀・犬の「ココア」・「鯉」・「蜘蛛のモク」たちである。この小動物たちと家族との生活のコラボの中で作者特有の優しい目線で、娘家族と生きものとの関わり方、作者もその中に身を置いて、軽妙なタッチで描写している。

私が特に惹かれたのは、俳句で「亀鳴く(春の季語)」と藤原為家

が云々と言われているが、基本的には亀には声帯がないので鳴かない。といわれているのをうのみにしていたが、すぐに飼っている娘さんは結構「くわんくわん」「わんわん」と口を開けて話ができるといふくだりにこれまた早速感動し信じてしまった。

二階で生活していた亀は娘の帰宅をいつも階段の上で待っていていた。洗面所までも着いて来る甘えん坊であったとか。愛に応える生きものたちとの交流に、小さな幸福感をいただいた作品である。

死ねば元素になって宇宙に浮遊すると説く作者論にもいたく感銘した。

全く脳が無く、脊髄の端が膨らんでいなくても凝っと目を見てい

る動物には「心」がある。と結んでいる。
何でもない日常茶飯事の中にも科学的に生き生きとした家庭教育
がなされているのだと文章プラス野上家の実生活を垣間見て感動を
新たにした作品だった。

祇園精舎の鐘の声

熊谷 和代

盛者必衰のの平家物語より始まる「鐘」に絞った「声の世界」徒
然草」の「鐘」をテーマに検証をしてゆく作者。諸行無常の韻を「黄
鐘調の最中の鐘の声なべて黄鐘調なり」と、赤ちゃんがこの世に生
を享けた第一声「おぎゃー」の産声が黄鐘調であり、これは世界共
通の「ラ音」であるという。

人間は生まれた時から無意識に無常を知ってい
たということを確認した作者。黄鐘調の鐘の音を
追及し、平安の昔に生きていた人々の深い無常観
に思いを致し、今も空しい紛争に明け暮れている
人々への警鐘とも取れる祇園精舎の鐘の心が心
届いて来ると結ぶ。音痴を以ってあきらめている
私の最も手の届かない範疇の作品であった。

文学の責任 — 自己中心性の克服 —

小川 公三

最初は難解なテーマだと表題だけ見て鑑賞はと、戸惑っていた
が、読み進むにつれて、文章の組み立ても整然としていて人間がい
かに自己中心の動物であるかを作者が過去に被害者となった自動車
事故を症例に取り、人類が未だに愚かしい戦争の繰り返しを重ね精
算もできないでいるのも本来、自己中心性を備えているものに他な
らない。全ての生物は自己の生命を維持種族を保存するために必
要な本能でもあると。

七十年前の敗戦は過酷な代償を払い懷疑することを学んだが、し
ばしば人は高慢な自負によって自滅するのである、と作者は検証す
る。

私達は歴史的な感動を伝えるためだけで無く歴史から学んだこと

を伝える責務があるとの主張で結んでいて感銘を新たにした作品で
あった。

東北あれから五年

竹内 絃子

この、ぞわぞわした感じは何だろう。

文学的作家の書き出しである。

落ち着かない奇妙な居心地の悪さ

海は日暮れの残照を受けて光っている

ぼんやりと薄墨を流したように

沈んで暗い。

二〇一一年東北大地震の地を訪ねた作者の生々し
い現地報告書である。教え子で福島大学の卒業生
が同行してくれた。

毎日見ていた青い海が牙をむいて

濁流となって押し寄せる

自然が本来の正体を現した姿だ。

文人の表現は描写が適格で語彙に無駄がない。

福島県から宮城県への駆け足の旅であったが、訪問したのはかつて
富士正晴同人誌の高校の部最優秀校受賞のご縁の学校であった。こ
こで「震災の語り部」を実行している学生さんの話に立ち会うこと
ができた。

文明や文化や人が生み出した財産は自然の大きな力の前では水泡
にも等しく親も兄弟も容赦なく持ち去ってしまう。人の営みは危な
い奇跡の上の虚構にも等しいとくる作者。震災から六年、今世紀
我々に突き付けられた大自然の牙は日本列島のあらゆる所で時を構
わず激震し、我々はその都度余震の恐怖にさらされているのである。

されど人生

藤本七三夫

さばさばとさすがが大手出版社の編集長をなさったご仁だ。言い回
しに無駄がない。淡々と語る語り草は読み易く飾りが無い。一語一

語が優しくお顔は存じ上げないが、同学年としての親しみをこめて読ませて頂いた。「愛飲人生結構」表題の示す通り「されど人生」「惱めど人生」されど「今を生きている」心身共に健康で豊かな作者に乾杯を送りたい。

七年目の母へ

増田 裕子

書き出しはデジャビュ（既視感）を体感した作者の母への鎮魂歌でもある。日本画に打ち込んでいた母が何度となくスケッチ旅行に訪れたヨーロッパ、情緒あるヨーロッパの風情を日本画に描こうと。母の描いたヨーロッパの街角風景に今立つ作者。己の才能に生きた母は、家事や子育ては苦手な作者は物心がつくまでは父方の祖母の元で過ごしたという。母は手先が器用で日本画の以前は紅型（びんがた）染をしていた。娘時代の作者にとって母は最も気を遣う人であり苦手な人であった。今思うと私達がいなければ母は才能を開花させず口になっていたかも知れない。そんな母の許を遠く離れて三十年余の歳月が流れた。母は親戚も夫、子供すらも遠ざけた。七年前母は他界した。心無いこととは裏腹に寂しかったに違いない。心に修羅を抱え染色に日本画に命を注ぎ、決して滅ぶことのない作品に命を完結させていったのだと今にして思う。

改めて母の歩いたであろうヨーロッパの街角に立ってみて見えて来るもの。今までの母との葛藤を赤裸々に綴った娘としての鎮魂の一文でもある。折からの教会の鐘にデジャビュを心静かに受け入れる貴女の娘であつて良かったと結ぶ感動の作品である。

5月13日 グランドパレス

福島誠浄さん「台湾の俳句」

徳島ペンクラブの平成29年度総会は5月13日、JR徳島駅近くのホテル グランドパレス徳島で開催する。今年、ペンクラブ創立から半世紀。今秋には大

応募締め切り 5月末日

第18回とくしま随筆大賞

徳島ペンクラブ主催の第18回とくしま随筆大賞の募集要綱がこのほど次の通り決まった。応募の締め切りが前回より1カ月早くなり、5月末となった。お間違いないよう。

●**応募規定** 内容は自由（エッセー、随想、主張など）。1人1編、未発表の作品に限る。A4、四百字詰め原稿用紙3枚以上5枚まで（縦書き）。ワープロの場合はA4用紙に1行40字（縦書き）で、字数は同じ。1行目に作品名と氏名を記入する。別紙に、作品名・氏名・年齢・住所・電話番号を記入。

●**応募資格** 徳島県内在住者、または徳島県出身で県外在住者。

●**作品送付先** 〒770-0873 徳島市東沖洲2丁目1の13 徳島教育印刷（株）内 徳島ペンクラブ「第18回とくしま随筆大賞」係。

●**締め切り** 平成29年5月31日（当日消印有効）。

●**発表** 7月（予定）徳島新聞に掲載、および本人に通知。

●**賞** ▼大賞（1編）賞状・賞金3万円

▼準大賞（1編）賞状・賞金1万円

▼佳作（1〜2編）賞状・記念品

大賞・準大賞の作品は29年10月発行予定の「徳島ペンクラブ選集」に掲載。

●**表彰式** 10月9日開催予定の「徳島ペンクラブ創立50周年記念パーティー」の席上で行う。詳細は後日、受賞者に直接通知する。

●**審査員** 依岡隆児・徳島大学総合科学部教授▽疋田耕資・徳島新聞生活文化部長▽竹内菊世・徳島ペンクラブ会長

※この件のお問い合わせは、ペンクラブ副会長の西池冬扇さん
電話088-642-1406番（日曜のぞく午前中のみ）まで。

春の文学散歩は

4月29日

2回目となる春の文学散歩、今年は去年と同じ4月29日(祝日)、「モラエスの歩いた道」と銘打ち、阿波踊り会館前を午前10時出発して眉山の麓を北から南へ、JR二軒屋駅まで2時間ほどかけて歩く。

道中、新町界隈ではモラエスのレリーフ胸像を見学。彼の墓所のある潮音寺や、高浜年尾・美馬風史師弟の句碑のある天神社に立ち寄り、新町小学校沿いでモラエス像をみて、瀬戸内寂聴さんが帰郷の際の定宿・旧阿波寂庵を訪ねる。

さらに南下して、小坂奇石が揮毫した、貫名菘翁(ぬきな・すうおう)生誕地碑を見学。この後、瑞巖寺、国瑞彦(くにたまひこ)神社や伊賀町3丁目のモラエス寓居跡を回り金刀比羅神社の階段で記念撮影。海野十三の菩提寺・観潮院に立ち寄り、なみだ町を通って、伝

「モラエスの歩いた道」を行く ◆◆◆ 丁山副会長がガイド役 ◆◆◆

きな記念行事も計画されており、事務局では秋に向けて景気づけとなるような総会にしたい考え。

当日は、総会議事の後、なんと俳句会代表で、弁舌さわやかな万福寺住職、福島誠浄(せいぎ)さんが、「台湾の俳句」と題して、同国の俳句事情を話してくれる。後半の懇親会では、お酒を酌み交わしながら会食、歓談。ペンクラブではめったにやらないカラオケも予定されている。

記

▽日時 5月13日(土)午後4時~7時半

▽場所 ホテル グランドパレス徳島

▽会費 6,000円(当日)

※出席ご希望の方は、同封のがきに切手(52円)を貼って、4月末日までに投函してください。

伊賀町から新町小学校前に転居したモラエス像(上)と今も「モラエス通り」として親しまれている伊賀町3丁目(下)



説の石「おっぱしよ石」を見、さらに江戸相撲で活躍した力士の墓石が多数ある焼香庵跡墓地をめぐる。JR二軒屋駅前解散というてんこもりのスケジュール。

昼食(希望者だけ)は二軒屋駅前の喫茶店「トーク」。今回もコースの設定、当日のガイド役は丁山俊彦副会長が担当。参加者は、同封のがきに、出欠の返事と共に昼食(幕の内の予定)希望の有無を明記してください。

この件のお問い合わせ、参加申し込みは前日までに丁山さん(携帯090-450810538)まで。

野上彰没後50年記念

多彩に「アカシア祭」

5月20日
シビック
センター

徳島ペンクラブ協賛の「野上彰没後50年記念アカシア祭」(野上彰の会主催、徳島現代詩協会など協賛)が、5月20日(土)午後1時30分から、徳島市シビックセンターホール(アミコビル4階、入場無料)で開催される。

アカシア祭の内容は、音楽と朗読など野上作品を取り上げた多彩なプログラム。徳島混声合唱団による、野上彰作詞、小林秀雄作曲「落葉松」の演奏や、野上彰作、長男・藤本草脚色のラジオドラマ「雁の曲」の朗読など。また、長男夫人・藤本昭子さん（地歌箏曲演奏家）の「萩の露」も。幕間には、長女藤本ひかりさんら5人姉弟による舞台あいさつも予定されている。



徳島市出身の叙情詩人・野上彰は、昭和10年代初めから、同42年58歳の若さで亡くなるまでの30年間、詩人としてだけでなく、囲碁雑誌の編集、小説、童話、戯曲、放送劇、訳詩など幅広い分野でマルチタレント振りを発揮し、目覚ましい活躍をした。今に歌い継がれ、この日演奏される「内町小学校校歌」も野上の作詞である。

会員短信

★山本安信さん



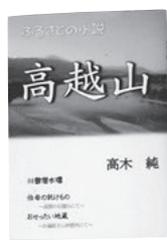
昨年12月、エッセー集「渋柿庵雑記」―自然と人の心もよう―(B6判変形、246ページ)写真)をKK教育出版センターから刊行した。8年前までの30年間、生活の中心にあった自宅と周りの自然への思い出を綴った。きっかけは、平成10年に出された「四季めぐる」(日本図書館協会・全国学校図書館協議会選定図書)と題するエッセー集が、その6年後NHKのラジオ放送で「徳島を読む」の朗読書に取り上げられ、3年ほど続いた。この朗読を聴いた多くの人たちから、感想や再販の声が寄せられたことが、今回の出版の動機となったという。

★本田まもるさん



1月、歌集「大河の風」(B6判変形、180ページ)写真)を東京・短歌研究社から出版した。平成9、21年に続く自身3冊目の歌集。21年から昨年までの作品485首をまとめた。ご自宅の近くに大河・吉野川が悠久の流れを湛え

ている。「河の流れは風を呼び、風は韻を奏でる。その河辺に生まれ育ち暮れて骨を埋める私である」とあとがきで結んでいる。定価2500円(税別)



★高木純さん 1月、「ふるさとの小説 高越山」(B6判変形、181ページ)写真)を大阪・(有)ニシダ印刷製本から出版した。本のタイトルとなった「高越山」のほか「伯母の託けもの」高開の石積みにて」など短編小説4編が収められている。農業、市会議員、作家の3足の草鞋もなんのその。「読み始めたらずめられない」面白さ。定価1000円。

新入会員

(敬称略、カッコ内は推薦人)

東條 孝 〒770-8074

徳島市八万町下福万187-11(田上副会長)

編集後記

10年前に発行されたペンクラブ創立40周年記念誌をひも解いていると、発足前後の様子、メンバーの心意気、熱気がひしひしと伝わってくる。元徳島新聞社長の前川静夫氏の肝いりでペンクラブが誕生したこと。県立文学書道館設立に、板東哲夫元会長らペンクラブが果たした役割の大きさ。さらに、瀬戸内寂聴さんの「一声」が、設立の決め手になったことなど。こうした先見の明を持つ人たちの情熱と努力を知るにつけ、創設から50年という節目の今年、ペンクラブに在籍する一人として、喜びと同時に責任の重さを感じる。現在、その半世紀を祝うイベントや機関誌「ペンクラブ選集」を50周年記念号として発刊する準備を進めているが、その成否を握るのは、会員一人ひとりの自覚ではないだろうか。編集子としては、記念号に全会員が寄稿してくれることが願いである。こんな状況下、とびっきりのうれしいニュースが飛び込んできた。竹内会長の、とくしま芸術文化賞受賞である。会員一同、心を一にして、記念号・記念事業を立派にやり遂げること、会長へのお祝いとしたい。(倉)